



令和7年度  
第3回

「未来をつくる こどもまんなかアワード」  
活動事例紹介集

こどもまんなか  
こども家庭庁

令和7年度

第3回

「未来をつくる こどもまんなかアワード」

## 活動事例紹介集

# 発刊に寄せて

こども家庭庁は、全てのこども・若者が、心身の状況、置かれている環境等にかかわらず、ウェルビーイングで生活を送ることができるこどもまんなか社会の実現を目指して様々な取組を推進しています。近年、社会構造の変化等により、こども・若者や子育て家庭を取り巻く環境がますます複雑化する中、こどもまんなか社会の理念の重要性はこれまで以上に高まっています。

こうした理念の実現に当たっては、行政だけでなく、地域、団体、そして個人が互いに連携し、時代の変化に応じた支援手法を取り入れながら、こども・若者支援に係る取組を進めていくことが欠かせません。そして、こうした取組を全国に広げ、誰一人取り残すことのない持続的な支援体制を構築していく必要があります。

こども家庭庁発足から3年目となる本年度においても、「未来をつくる こどもまんなかアワード」を実施し、令和7年11月27日に表彰式を開催しました。本アワードは、こどもまんなか社会の実現に向けた優れた活動を表彰し、その取り組みを広く社会に紹介することで、同様の活動のさらなる発展を後押しすることを目的としています。今年度は、内閣総理大臣表彰2団体、内閣府特命担当大臣表彰3団体に加え、広く紹介するに値すると認められた4団体へ「こども・若者活動奨励章」が授与されました。

この度受賞（章）された皆様の、長年にわたる真摯な御尽力に深く敬意を表するとともに、この受賞を新たな糧として、今後ますます御活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

この「活動事例紹介集」では、日々こども・若者のために尽力されている団体や個人の皆様の取組を紹介しています。これらの事例が広く共有され、より良い社会の実現につながる一助となれば幸いです。

令和8年3月  
こども家庭庁

## 第3回「未来をつくる こどもまんなかアワード」 の選考に関わって

---

「未来をつくる こどもまんなかアワード」も令和7年で第3回を迎えることになりました。今年度は、未来をつむぐ「こども・若者部門」の13団体、未来へつなぐ「応援団」部門の54団体の選考を選考委員9名で行いました。

応募された団体の活動は、どの団体も他と比較できるものではなく、特徴ある素晴らしい活動をされていました。特に今年の多くの団体の活動内容は多岐にわたり、幅の広い年齢を対象にされ、そして利用者への非常にきめ細やかな、心温まる対応をされているように感じられました。それは、支援者と利用者の垣根が取り払われた、ある意味インクルージョンな関係とでもいうのでしょうか、支援者も利用者も同じ地平にたって楽しもう、と言うような団体が多かったからかもしれません。特に受賞された団体の方々の支援は、その場での「してあげる」関係から「地域でいっしょに」生きていく、という人生の歩みを共助の理念をもって具現化されていたのではないかと思います。

未来をつむぐ『こども・若者』で総理大臣賞を受賞された団体は、本当に「若者らしい発想からの自由な活動への広がり」が感じられ、フレッシュな心地よさを感じました。

未来へつなぐ『応援団』部門を受賞された団体の「必要な支援を見つけるたびに、それを組織化によって充当してゆく手腕」は素晴らしく、的を射た地域支援であると感じました。

一方気になることもありました。それは地域間格差のようなものです。応募されなかった県でも、積極的なこども若者支援が行われていない、とは決して思いませんが、応募される地域が偏っていることや、そのノウハウにかなりの差ができてきているのではないかと。言うことです。人口減が進んでいる地域での積極的な関わりも見られましたが、長年取り組み支援をされている団体がある地域周辺では、その団体に刺激されてか多くの団体が生まれてきている様にも思えました。

今後このアワードの存在がもっと多くの地域に認知され、その地域にあった支援をする団体が増え、積極的に応募されることを期待したいと思います。

選考委員長  
石田 陽彦

# 表彰式の模様



黄川田内閣府特命担当大臣の挨拶



令和7年度 第3回「未来をつくる ともまんなかアワード」  
令和7年11月27日（木） 於：とも家庭庁 14階共用大会議室

未来をつむぐ「子ども・若者」部門

【内閣総理大臣表彰】

# 楊志館高等学校 徳育宣隊



未来をつむぐ「こども・若者」部門  
【内閣府特命担当大臣表彰】  
道南eachプロジェクト



未来へつなぐ「応援団」部門

【内閣総理大臣表彰】

# 特定非営利活動法人 こまちぷらす



未来へつなぐ「応援団」部門  
【内閣府特命担当大臣表彰】  
NPO法人 河原部社



未来へつなぐ「応援団」部門  
【内閣府特命担当大臣表彰】  
特定非営利活動法人 光希屋（家）





# 目次

---

## 未来をつむぐ「こども・若者」部門

### 【内閣総理大臣表彰】

- ・ 楊志館高等学校 徳育宣隊 ..... 2

### 【内閣府特命大臣表彰】

- ・ 道南eachプロジェクト ..... 4

### 【こども・若者活動奨励章】

- ・ 横井 月美 ..... 6

# 目次

---

## 未来へつなぐ「応援団」部門

### 【内閣総理大臣表彰】

- ・ 特定非営利活動法人 こまちぷらす …… 8

### 【内閣府特命大臣表彰】

- ・ NPO法人 河原部社 …… 10
- ・ 特定非営利活動法人 光希屋（家） …… 12

### 【こども・若者活動奨励章】

- ・ 一般社団法人 京都わかくさねっと …… 14
- ・ 特定非営利活動法人 パノラマ …… 16
- ・ 特定非営利活動法人  
東北海道スポーツコミッション …… 18



未来をつむぐ「こども・若者」部門

【内閣総理大臣表彰】

## 楊志館高等学校 徳育宣隊

— 大分県 大分市 —

代表者 小野 茉莉

### 受賞者の概要

3名の生徒が公園の清掃活動に参加したことをきっかけに始まった活動は、約5年で構成員が50名を超え、地域に根差した取り組みへ発展しました。清掃活動を行いながら、こども食堂や高齢者施設でも様々な企画・活動を行っており、幅広い年齢層を対象として、地域に貢献する活動を継続的に行っています。



### 主な活動内容

#### ●清掃活動

毎月、公園での清掃活動を実施するほか、曜日ごとに重点地域を設定し、ゴミ拾いを行っています。また、スポーツ感覚でゴミ拾いを楽しむ「スポGOMI大会」にも参加し、入賞するなど、清掃活動を多面的に展開しています。

#### ●こども食堂での活動

清掃活動で集めた落ち葉を肥料として活用し、野菜を栽培しています。収穫した野菜はこども食堂に寄付し、調理・提供まで行っています。

さらに、食育に関する勉強会を開催し、地域のラジオや各メディアの取材依頼を受けるなど、広報活動にも積極的に取り組んでいます。これらを通じて、地域に根ざした食育と支援活動を推進しています。

#### ●高齢者施設での活動

地域の高齢者福祉施設3か所と連携し、定期的に誕生日会などのイベントに参加しています。幅広い世代が楽しめる楽曲に、ラジオ体操とヲタ芸の要素を取り入れた「ヲタ芸リハビリ体操」を考案し、施設で披露しています。



## 選考委員コメント

たとえば、高齢者施設のリハビリに「ヲタ芸」を取り入れた体操を開発する――。この取り組みをみるだけで、生徒たちが主体的に考え、柔軟なアイデアとアプローチで社会の課題解決に取り組んでいることがよく伝わってきます。工業、調理、商業、福祉など複数の学科やコースを持つ強みを生かし、清掃活動、肥料づくり、こども食堂の運営など、多様な取り組みを行っていることを、選考委員会は高く評価しました。

選考委員による現地調査では、「人にありがたうと言われることがうれしい」「(こども食堂で) こどもたちがおいしいと言ってくれ、笑顔になってくれることがやりがい」など、活動にかかわる生徒たちが自信を持って語ってくれたのが印象的でした。活動を通じて生徒自身が成長し、自己肯定感を高めているようです。そうしたこどもたちのまっすぐな思いが、地域住民や企業などの関係者を動かし、協力者を増やし、活動の輪を広げている点が素晴らしいと思います。

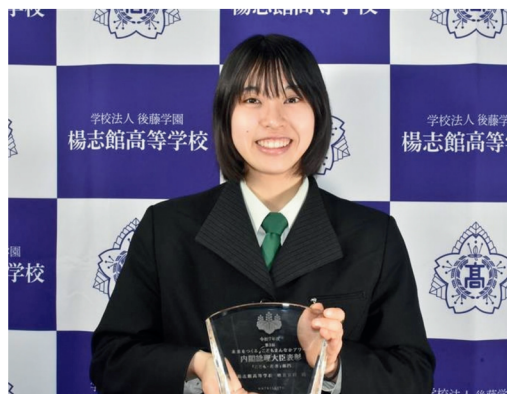
## 受賞者コメント

楊志館高等学校徳育宣隊の活動は、コロナ禍で学校行事や地域活動が制限される中、ボランティア部員3名による公園清掃から始まりました。この小さな取り組みは次第に広がり、現在では、毎朝の大分駅周辺での清掃やこども食堂・高齢者施設での活動へと発展し、約5年間で構成員が50名を超えるまでになりました。

活動において工夫した点は、清掃で集めた落ち葉を袋に詰めて発酵させ、肥料として再利用する仕組みを考案したことです。この肥料で育てた野菜をこども食堂に提供し、食育と環境保全を結びつけました。また、こども食堂では季節のイベントを企画し、参加者に楽しんでいただけるよう工夫を重ねています。さらに、高齢者福祉施設では、「介護者教室」を開催し、介護予防を目的とした活動を行いました。また、大分県青少年赤十字活動助成事業を活用させていただき、こども食堂と高齢者施設のコラボ企画で披露する「ヲタ芸リハビリ体操」も開発しました。こうした取り組みが評価され、他の施設からも誕生日会などへの出演依頼が増え、複数施設との連携が軌道に乗っています。

活動を通じてお伝えしたいことは、「誰一人取り残さない社会」を実現するためには、身近な場所での小さな工夫と継続が大切だということです。

これからも、大分の地域の皆様とともに、<sup>(ふ)つう</sup>普通に暮らせる<sup>(く)</sup>幸せ<sup>(し)あわ</sup>『ふくし』を創り続けていきます。



【内閣府特命担当大臣表彰】

# 道南eachプロジェクト

— 北海道 函館市 —

代表者 岡本 啓吾 センター長

## 受賞者の概要

中高生から大学生までが毎年集まり、一冊の雑誌を制作するプロジェクトです。学生たちは企画立案から取材、執筆まで主体的に取り組み、地域の魅力を学生ならではの視点で再発見しており、地域と関わりながら成長することで、学生と地域の双方に新たな価値を生み出しています。



## 主な活動内容

### ● 「道南ユースマガジンeach」の作成

函館コミュニティプラザ Gスクエアを拠点に、中学生から大学生を対象にプロジェクトメンバーを募集し、約5か月間で一冊の雑誌を制作するプロジェクトを実施しています。テーマ決定、取材、文字起こし、レイアウト、デザイン、配本まで、すべての工程を学生自身が主体的に担当します。取材活動を通じて地域と深く関わり、地元の魅力を再発見する機会にもなっています。

### 【記事の一例】

- ・ 漁師への取材を通じて、函館で低利用とされるブリとマイワシを活用した料理特集
- ・ アーティストとしても活躍する教員に、教育と芸術の未来についてインタビュー
- ・ 野良猫を追いかけて撮った道のりや風景を元にした小説
- ・ 函館の五稜郭戦争をモデルにした漫画



## 選考委員コメント

並々ならぬ主体性をもって若者自身が社会参画していることが高く評価され、今回の受賞につながりました。地域の魅力に対して若者という目線から迫り、自身の興味関心を活かした企画立案や取材、執筆を経て、多様な若者の想いを地域住民に向けて発信している点には特筆すべきものがあります。さらに、冊子の完成がゴールではない点が大きな特徴です。時には衝突することも含め、他者と共に一つの製作物を作る過程を通じた自身の成長や、サードプレイスの獲得、さらにはコミュニティ形成につながっていることなどは、大抵の物事が個人で行えるようになった今の時代だからこそ、ますます重要性を増していると言えます。

学生が中心となって冊子を製作する取組は、他地域にもいくつか存在します。しかしそのオリジナリティ要素を差し引いたとしても、本取組は大変に素晴らしいものです。その時代を生きる若者の持てる特色を活かしつつ、道南に暮らす多様な人たちと共に、今後とも活動に取り組まれることを期待します。

## 受賞者コメント

このたびは、道南eachプロジェクトをこども家庭庁にご評価いただき、心より感謝申し上げます。

本プロジェクトでは、子ども・若者一人ひとりの個性や思いを丁寧に深掘りし、言葉や表現として形にするため、自己探求型のワークショップを重ねてきました。中学生から大学生まで、学年や年代の異なる学生がチームを組み、互いの違いを尊重し合いながら関係性を築く設計を大切にしています。

また、ライターやデザイナー、カメラマンといった専門家が関わり、短時間で実践的なスキルを伝える講座を行うことで、若者の「やってみたい」を後押ししてきました。雑誌制作においては、運営メンバーはあくまで“バックアッパー”として伴走し、テーマ決めから取材、編集、デザイン、配本までを学生主体で進めることを徹底しています。

完成した雑誌を自ら配本するイベントや、過去の参加学生が運営に関わる仕組みも、eachに込めた「一人ひとりの存在が、次の誰かの力になる」という思いの延長線上にあります。

この受賞を励みに、今後も地域の中で、子ども・若者が自分の声で未来を描ける場を育ててまいります。



【こども・若者活動奨励章】

## 横井 月美

— 福井県 越前市 —

### 受章者の概要

小学生時代に父親と参加した多世代交流の食事をきっかけに、世代を超えたつながりの大切さを実感しました。新型コロナウイルスの影響で地域行事が途絶えていた中、「もっとつながりを持つ場を」との思いから、中学生であった令和4年からこども食堂の運営を行っており、食材の調達やメニューの考案など、運営全般を主体的に担い、地域交流の場づくりに積極的に取り組んでいます。



### 主な活動内容

#### ● 「大虫みんなの食堂」の運営

毎月第3土曜日、大虫町生活改善センターにて「こども食堂」を定例開催しています。食材の調達やメニューの考案をはじめ、当日の運営まで、食堂に関する業務全般を担っています。食材は、市内の精肉店や青果店から賞味期限が近づいたものを譲り受けるなど、地域とのつながりを大切にしながら、地元で根差した活動を目指しています。

食堂には、小中高生だけでなく、子育て世帯の家族連れや高齢者世帯など、幅広い世代が訪れ、毎回約40名が利用しています。また、食堂に来るのが難しい高齢者や障がい者世帯には、配達サービスも行っています。



## 選考委員コメント

このたびは奨励章の受賞、誠におめでとうございます。

横井様がこれまで情熱を注いできた「大虫みんなの食堂」が、多くの方にとって大切な居場所へと発展していること、選考委員一同、とても感銘を受けました。一人の若者の想いが、多くの人と人を結び付け、地域の活性化に繋がっているように感じます。

また、地域の個人商店との協力による地域資源の活用や、食堂に足を運べない方々への配達等、様々な問題に対し地域全体を巻き込みながらの取り組みは、大虫町に活力を与えています。

横井様の行動力や地域を動かすリーダーシップはもちろんのこと、地域の方々や周りの仲間の協力があってこそ、この活動が実現できているのだと感じます。このつながりこそが、大虫町にとってかけがえのない宝物です。

今後のご活躍を心より応援するとともに、横井様の持ち前の行動力と周囲の方々との絆で、より一層素晴らしい活動へと発展させていくことを心から期待しております。

## 受章者コメント

私たちが住む地域では、独居高齢者や障がい者の世帯が年々増加しており、社会的に孤立しやすい状況にあります。また、家族の形も多様化しており、新たに地域に転入してきた世帯、ひとり親家庭、核家族で子育てをしている家庭なども、それぞれ特有の悩みを抱え、地域とのつながりが希薄になりがちです。こうした状況に加え、近年は大規模な自然災害の頻発、物価高騰による生活の困窮、新型コロナウイルスの影響による地域コミュニティの希薄化など、住民の不安は一層高まっています。

私たちは、子ども食堂を通して、地域の人が集い、支え合う「場所」を作ることで、地域コミュニティが再構築し、孤立の解消と「ご近所さま力」の強化を目指しています。

私たちは、自治会や地域包括支援センターと連携協力しながら子ども食堂の運営、気付きがちな家庭への食事配達と声掛け運動を実施しています。食事を通していろんな世代やいろんな環境を背景に持つ地域の人と一緒に会し、「おしゃべり」することで参加者同士の関係作りができています。

調理スタッフで参加している一人暮らしの高齢者は、「久しぶりに子どもの声を聞いた。子どもを見ているだけで元気がもらえるわ」と食堂に来ることが楽しみになっているようです。また、高校生は「コロナで地域行事がなくなったから、こうやって同級生で集まるのが楽しい」と、参加者は何かしら楽しみを持って訪れ、みんなの居場所になっています。





未来へつなぐ「応援団」部門

## 未来へつなぐ「応援団」部門

【内閣総理大臣表彰】

### 特定非営利活動法人 こまちぷらす

— 神奈川県 横浜市 —

代表者 森 祐美子 理事長

#### 受賞者の概要

カフェ型の居場所を運営し、こどもの発達に不安を抱える保護者やダブルケアに直面する当事者などが情報交換できる場を提供しています。また、子育て家庭の声を活かしたワークショップや、全国での講座・インターンプログラムを通じて活動を広げているほか、地域や企業と協働して出産祝いを届け、まち全体で子どもの誕生を祝う風土づくりに取り組んでいます。



#### 主な活動内容

##### ● カフェ型居場所の運営

特別な理由や目的がなくても、気軽に立ち寄れるカフェ型の居場所「こまちカフェ」「こよりどうカフェ」を運営しています。こうした場を設けることで、団体が実施している活動への参加の間口を常に広く開き、誰もが自然に関わりを持てる環境づくりを目指しています。

##### ● 学びあい事業の実施

こどもの発達に不安を抱える保護者、子育てと介護のダブルケアに直面している当事者、不登校・ひきこもりの子を持つ保護者など、同じ悩みを抱える人同士が出会い、話し合うことができる活動を実施しています。

##### ● 「ウェルカムベビープロジェクト」

「まち全体で赤ちゃんの誕生をお祝いし、子育てを応援できる社会になること」を目指し、出産祝いを地域の人々や企業商店とつくり、届ける事業を実施しています。

##### ● 「3枚の葉っぱワークショップ」

様々な立場の人の声を「葉っぱ」のかたちに可視化し、自分とは異なる視点や意見を知り、学ぶことができるワークショップを開催しています。



## 選考委員コメント

本団体の取組は、こどもや子育て家庭にそっと寄り添いながら、地域全体で支え合う関係を丁寧に育んでいる点がとても印象的です。地域の子育て支援情報を集約した「地域こそだてカレンダー」は、子育て家庭の目線に立った工夫がなされ、必要な情報に無理なくたどり着ける仕組みとなっています。また、カフェで製造した惣菜を保育園と連携して提供する取組は、日々忙しい子育て家庭の負担をやさしく支えています。

特別な目的がなくても立ち寄れるカフェを拠点に、困ってから相談するのではなく、普段の関わりの中からつながりや対話が生まれ、それぞれが無理なく関われる場へと広がっていく姿は、「誰一人取り残さない」こどもまんなか社会の理念に深く重なります。多くのボランティアや地域の人々、企業とともに歩みながら、その想いや仕組みを他地域へも丁寧に届けている点は、温かさと広がりを併せ持つ取組として高く評価されます。

## 受賞者コメント

こまちぶらすは「子育てをまちでプラスに」を合言葉に、子どもを育てることを保護者個人や家族のみの責任にするのではなく、まちの様々な人々の関係性の中で育むことをビジョンに活動しています。活動の拠点は居場所ともなる二店舗のカフェで、多くの人にとって足を運びやすい敷居の低い場であり続けるために、工夫を凝らして自主財源を基盤として運営しています。

飲食の提供以外にも、「不登校・ひきこもり」「ダブルケア」「障害」について安心して話せるイベントを日常の中で開催するほか、多様なボランティアの関わりや寄付協賛等で支えていただくことで、地域に根差した場を継続しています。

たくさんの方々が関わる中で生まれた協働事業の一つとして、出産祝いを地域でつくり届ける「ウェルカムベビープロジェクト」が挙げられます。

これは、その過程で社会の中に子育てへの関心を育んでもらう仕掛けを施し、社会全体の理解を高める試みでもあります。同様に、商店会の事務局を担ったり、人々の暮らしの中に埋もれた声を拾いデータベース化して研修に活かしたりするなど、多様な人々が緩やかにつながり「まちぐるみ」で子育てを支える社会の実現を目指しています。

昨今では、私たちのこれまでの試行錯誤を踏まえ、日本の各地でそれぞれの地域性や風土に合わせたカフェ型の居場所を作ろうとされている方々が、少しでも立ち上げやすく軌道に乗せやすいよう、居場所立ち上げ支援講座等も実施しています。



## 未来へつなぐ「応援団」部門

【内閣府特命担当大臣表彰】

### NPO法人 河原部社

— 山梨県 韮崎市 —

代表者 西田 遙 理事長

#### 受賞者の概要

中高生のための第三の居場所である「Miacis（ミアキス）」を企画・運営しています。高校生アイデアコンテスト「SPARK」、地域企業80社との連携、ユースカウンシルによる政策提言などを実施し、地域と中高生をつなぐ役割を担っており、これまでに150以上の視察を受け入れるなど、ユースセンターのロールモデルとして、他地域への波及にも貢献しています。



#### 主な活動内容

##### ●ユースセンター「Miacis（ミアキス）」の企画・運営

中高生が誰でも来ることのできる居場所を企画・運営しています。地域の中高生の6割が登録しており、年間約1万人の中高生の利用を集めています。スタッフは日常的な交流を通じて中高生と信頼関係を築き、進路や人間関係などの相談にも対応しています。

##### ●高校生アイデアコンテスト「SPARK」の実施

「17歳の夢を17万円で叶えるコンテスト」を実施しています。スポンサー企業へのプレゼン選考を通して選ばれた、「文豪ゆかりの地を巡る旅」や「オリジナルボードゲームの製作」といった高校生たちの夢を実現させています。

##### ●ユースカウンシル事業の実施

中高生の声を社会に橋渡しする役割を担っており、韮崎市の子どもの権利条約にも中高生の声を反映しました。また、「こどもまんなかTEENSカイギ」を開催し、こどもたちの声をワークショップ形式で拾い上げています。



## 選考委員コメント

このたびは、誠におめでとうございます。選考委員一同、本取組が地域に根づき、若者の居場所として機能してきた点に深い感銘を受けました。「こどもまんなか」の理念のもと、若者を管理や指導の対象とするのではなく、「いてもいい」「行きたい」と感じられる安全で安心な居場所を地域の中に丁寧に積み重ねてこられた姿勢は、非常に意義深いものです。

人口約3万人規模の地域において、中高生の3割以上が利用し、年間来場者数が1万人を超えていることは、若者のニーズを的確に捉えた取組であることを示しています。また、スタッフが複業という形で関わり、多様な価値観や生き方に触れられる環境が、若者にとって自然な学びや将来への視野を広げる機会となっている点も高く評価されます。

本取組は高いモデル性を有しており、今後その知見や姿勢が他地域へと波及していくことを期待しています。

## 受賞者コメント

山梨県初のユースセンターを運営しています。最も注力したのは、中高生にとって「管理される場所」ではなく「自分たちの場所」だと感じられる環境設計です。大人が一方的にプログラムを提供するのではなく、中高生一人ひとりの「やりたい」という小さな声を拾い上げ、プロジェクト化する伴走支援を徹底しました。また、施設運営においては、親でも先生でもない「斜めの関係」の大人としてスタッフが接することで、家庭や学校では出せない本音を引き出すコミュニケーションを大切にしています。地元の大学生をボランティアとして巻き込み、少し年上の先輩としてのロールモデルを身近に配置したことも、若者が集まり続ける大きな要因となっています。

公設民営の仕組みを活用し、行政との密接な連携を図るほか、地域企業とのプロジェクトも展開しています。また、単なる居場所提供に留まらず、中高生が地域課題の解決に参画するような、市民参画の制度構築にも携わってきました。

地域の中に、若者が「自分らしくいられる居場所」があることは、その街の未来への投資であると考えています。Miacisでの経験を通じて、中高生が「この街なら何かできる」という自己効力感を持って社会へ羽躍していくことを目指しています。こうした「暮らし」と「教育」が交差する場づくりが、全国の地方都市における活性化のモデルケースとなるよう、日々実践を積み重ねています。



## 未来へつなぐ「応援団」部門

【内閣府特命担当大臣表彰】

### 特定非営利活動法人 光希屋（家）

— 秋田県 大仙市 —

代表者 ヨン・キム・フォン・ロザリン 理事長

#### 受賞者の概要

不登校・ひきこもり当事者や家族の居場所運営やオンライン支援に加え、駅前広場で対象を限定せず悩み相談や雑談に応じる傾聴活動を行っています。秋田大学大学院の傾聴ボランティア養成講座の実践の場として活用し、教職員向け研修も実施するなど、将来の支援者育成や自殺予防にも注力しています。



#### 主な活動内容

##### ●大仙市子ども・若者総合相談センター「ふらっと」の運営受託

不登校やひきこもりといった悩みを抱える当事者やその家族の居場所として、子ども・若者総合相談センター「ふらっと」を大仙市より受託し、運営しています。オープンチャットグループによるオンライン居場所も開設しており、支援を必要としている人々に様々なアプローチで支援を届けています。

##### ●「ほほえみの場プロジェクト」の実施

県内の駅前広場に「ほほえみの場」ブースを設け、傾聴ボランティア活動を行っています。本プロジェクトは、秋田大学大学院医学系研究科地域心身医療学講座と共催しています。現役の学生たちも活動に参加することで、支援者の養成にもつながっています。

##### ●こども食堂の運営

家庭で十分な食事を得られない子どもや、ひとりで食事をするのが多い子どもに対して、無料で食事を提供しています。また、子どもたちとの交流を望む地域住民も、ワンコインで利用することができ、食事を通じて子どもたちや地域住民が交流できる場となっています。



## 選考委員コメント

貴法人の活動で特筆すべきは、代表自身のひきこもり経験と大学院での高度な研究に基づいた、圧倒的な専門性と当事者性です。

自殺やひきこもりという地域の深刻な課題に対し、秋田を拠点として真正面から向き合う姿勢は極めて尊いものです。

また、スタッフの多くが当事者であることは、支援を受ける側にとって何よりの安心感に繋がっています。

居場所としての拠点運営やSNSの活用、さらには駅前での傾聴活動を通じ、悩みを持つ人やその家族に寄り添う草の根の活動は、多くの社会復帰という確かな成果を生んでいます。

さらに、傾聴ボランティアの育成や地域住民との交流を深めることで偏見を排し、誰もが共生できる土壌を育てている点も高く評価されました。

専門的な知見と地域への献身が見事に融合した貴法人の活動は、まさに地域福祉の希望の光です。今後のさらなる飛躍を期待しております。

## 受賞者コメント

活動において工夫した点は、当事者性と専門性を基盤に、「来られる時に来られて、途中で離れても戻ってこられる居場所」を設計していることです。年齢制限を設けず常設とし、土日や孤立しやすい長期休暇期間も開所することで、支援が途切れない体制を整えています。また、同じ経験をもつピアスタッフを配置し、「助言する・される」ではなく「共に過ごす」対等な関係を大切にしています。

私は、自身の当事者性が専門性を深め、専門性が現場へと還元される循環の中で活動できていることに感謝しています。その在り方を受け入れていただけたことが、利用者の成長を支え、ピアスタッフとして育っていく土壌にもつながっています。

制度面では、「子ども・若者育成支援推進法」に基づく子ども・若者総合相談センター制度を活用し、相談支援と居場所機能を結びつけています。

不登校やひきこもりは誰にでも起こりうる状態です。その状態を否定せず、地域全体で支え合える社会を目指してまいります。ふらっとは、ひきこもりは固定された属性ではなく一つの状態であり、その状態にあっても人は誰かの力になれると考えています。誰もが成長できる余白を持つ存在であるという信念のもと、今後も実践を重ねてまいります。



## 未来へつなぐ「応援団」部門

【こども・若者活動奨励章】

# 一般社団法人 京都わかくさねっと

— 京都府 京都市 —

代表者 齊藤 常子 代表理事

### 受章者の概要

生きづらさを抱える若年女性が地域で孤立せず安心して過ごせる居場所を提供しています。また、性別や年齢を問わず地域の誰もが利用できる居場所も開設し、地域のこども、高齢者、一人暮らしの学生など多様な人の交流の場も創設するなど、ターゲットとユニバーサルの両方の観点からのアプローチを行っています。



### 主な活動内容

#### ● 「わかくさりビング」

生きづらさを抱える少女たちが主体となって居場所を運営しています。お誕生日会や料理教室等のイベントを月2～3回開催しているほか、その他の日も部屋を解放しており、休息や勉強等、自由に利用できます。「少女たちのやってみたいを応援するチアーズプロジェクト」を実施しており、資格取得や詩集の発行、創作活動など、地域や企業の協力のもと、少女たちを支援しています。

#### ● 「大人こども食堂」

老若男女、誰でも参加できる食堂を解放しています。幅広い世代が訪れ、温かい手作りのご飯を食べながら交流ができる場となっています。



## 選考委員コメント

近年若い女性について、自殺者数の増加や、性被害など含めた多様な困難が広く知られるようになってきました。一方で困難を抱える若年女性支援の各地でまだ十分な状況で、京都わかくさねっとの取り組む活動はとても重要な活動だと感じました。

近年、若者の支援というと大都市の繁華街・歓楽街でのアウトリーチ等の活動が知られていますが、この京都わかくさねっとの活動は、それぞれの地域で生きづらさや困難を抱えている若年女性たちが大都市に出ていく前に、地域で何ができるか、他地域でも学ぶべきたくさんの方のヒントが詰まっています。若い女性たちが居場所を主体的に作っていたり、フェミニスト・カウンセリングの実施などジェンダーの課題に意識的に取り組んでいるなど、活動の軸や着眼点にも注目です。秘匿性が求められるシェルター事業もしながら、「子ども大人食堂」等地域に開かれた活動も並行していることも素晴らしいと思いました。

## 受章者コメント

京都わかくさねっとのカフェに初めて来たのは、家に居場所のなかった少女でした。その後、シングルマザーや学校に行きづらい子どもたち、仕事や暮らしに困った大人たちが自然と集うようになりました。その中で、最初は黙ってごはんを食べていた少女が、少しずつ周囲と言葉を交わしながら自分を取り戻していきました。

「自分だけがこんなにつらいのだと思っていただけ、みんなそれぞれに弱さやしんどさを持っていて、それを分かってくれる人がいることが生きる力になる」

「親じゃないのに、いっぱい助けてくれてありがとう」これは、利用者である少女たちの言葉です。

私たちは、支援の窓口だけでなく、生きづらさを抱える少女たちをはじめ「誰でも戻ってこられる日常の居場所」を地域の中につくるために工夫を重ねてきました。

この居場所において、食事、相談、表現活動、地域交流などを通じて、ひとりひとりが役割と尊厳を取り戻していきます。また、京都市の若年被害女性等支援事業や更生保護、一時保護、生活保護などの事業とも連携し、必要な支援につながりながら伴走しています。

この受章を励みに、子どもも大人も「ここにいていい」と思える居場所を地域内でさらに広げていきます。



## 未来へつなぐ「応援団」部門

【こども・若者活動奨励章】

### 特定非営利活動法人 パノラマ

— 神奈川県 横浜市 —

代表者 石井 正宏 理事長

#### 受章者の概要

神奈川県立田奈高校で校内居場所カフェ「ぴっかりカフェ」と相談室「Drop-In」を運営しています。信頼関係を築きながら不登校や孤立を防ぎ、進路支援や社会的自立を促進する活動を10年以上継続しています。



#### 主な活動内容

##### ●校内居場所カフェ「ぴっかりカフェ」

神奈川県立田奈高校内の図書館において、毎週木曜日の放課後に校内居場所カフェを運営しています。お菓子や飲料の提供のほか、フードバンク等から寄付された食糧の支給を行っています。在校生はもちろん、卒業生や中途退学者も利用することができます。学校の中に居場所カフェを構えることで、学校に居心地の良い場所があること、自分を見守って力になってくれる大人がいることを生徒たちが実体験を通じて感じられるようにしています。

##### ●相談室「Drop-In」

生徒たちの悩みに対し、的確な対応を行うために青春相談室「Drop-In」を運営しています。「ぴっかりカフェ」の利用を通じて生徒たちと関係性を構築し、その中であがってきた生徒たちの悩みを丁寧に聞き取り、必要に応じて教職員と連携を図り支援体制を構築しています。



## 選考委員コメント

当該団体は、神奈川県立高校の2校で校内居場所カフェ「ぴっかりカフェ」と「BORDER CAFÉ」を運営してきました。生徒にとって居場所の居心地を高め、信頼できる大人と出会うための考え方を言語化し、その実践を他団体にも共有することで、全国に広がり始めている校内居場所カフェの牽引役を果たしています。

不登校や中退、子ども達が抱える生きづらさに対して、学校内で民間団体が生徒と出会い、信頼関係を結ぶことで、外部支援につなぎ継続してサポートできる体制をつくり、教育と福祉を接続しています。

学校内の図書室という相談室よりも敷居の低い場所を活用し、学校司書との連携を持ち、本や音楽だけでなく、季節行事をイベントとして実施し、生徒が多様な文化に触れるきっかけをつくっています。若者支援が地域と切り離されて行われることが多い中、カフェには市民ボランティアが運営に参加し、生徒が様々な生き方と出会う機会にもつながっています。在校生のみならず中退者、卒業生も対象にしている点も高く評価されました。

## 受章者コメント

NPO法人パノラマは、子ども・若者・元若者すべてが取りこぼされることなく、パノラマ写真のように包摂され、生き生きと暮らせる社会を創るために横浜で活動しています。ひきこもり支援歴の長い現理事長が、最後の砦となる高校での支援をしたいと考えていたところ、神奈川県立田奈高校に相談員として呼ばれ、2014年に図書室に校内居場所カフェ「ぴっかりカフェ」を開始したことで法人が始まりました。その後、神奈川県立大和東高校にもBORDER CAFÉが生まれ、校内居場所カフェはこども家庭庁の定めるこどもの居場所の一つにもなり、全国に広がりを見せています。

ぴっかりカフェには年間約1700名の生徒が来店し、スタッフと多くのボランティアに出会います。ジュースやお菓子、お味噌汁が提供され、自由に過ごせる居場所で、先生でも親でもない大人と一緒にゲームやおしゃべりをすることで関係性が構築され、「信頼貯金」が貯まっていきます。そうして、少しでも生徒の視野が広がり、学校生活に彩りが加わるようにと心がけています。

また「信頼貯金」が貯まると、生徒から相談が寄せられるようになり、個別相談を実施して、一緒に問題解決に取り組んでいます。

自分から困ったと言えない10代の子どもたちにアウトリーチできる仕組みが「校内居場所カフェ」です。目の前の子どもたちとの出会いを大切にしながら、全国に校内居場所カフェが広がるように、今後も活動を続けていきたいと思えます。



## 未来へつなぐ「応援団」部門

【こども・若者活動奨励章】

# 特定非営利活動法人 東北北海道スポーツコミッション

— 北海道 釧路市 —

代表者 中島 仁実 理事長

### 受章者の概要

釧路市におけるこどものスポーツ人口減少を受け、教育委員会と連携し市内全小中学生へ無料配布する雑誌を年4回発行しています。また、アリーナの空き部屋を活用した幼児体育室やキッズ広場、教育大学と連携した非認知能力向上遊び、パラスポーツ体験など、スポーツを軸に多角的な子ども支援を展開しています。



### 主な活動内容

#### ●フリーペーパー「Memberover」の発行

スポーツ全体の競技人口が減少する中、子どもが「スポーツを始めたい」と思い、親が「応援したい」と感じられるきっかけづくりを意識して制作しています。発行にあたっては、地元企業から協賛広告を集め、地域と連携しながら子どもたちのスポーツ活動を応援する仕組みとしています。

#### ●指定管理施設「ウインドヒルクしろスーパーアリーナ」を活用したイベント

釧路市から委託を受けている施設を活用し、子育て世帯の遊び場づくりを法人の自主事業として実施しています。施設の空いているスペースや時間を有効活用し、特に寒さが厳しい冬季における遊び場としての利用を促進しています。

#### ●「インクルーシブキッズスポーツフェス」の開催

小学生以下を対象としたスポーツ体験イベントを開催しています。イベントでは、ボッチャやフライングディスクなどのパラスポーツ体験ブースを設置し、親子で一緒に楽しめる内容を提供しています。また、障がいへの理解を深めるため、親子で学べる「パネルクイズ」も実施しています。



## 選考委員コメント

スポーツの勝敗や成績にとらわれずすべての「頑張る子どもたち」を応援するという姿勢、また、多様化する障がいの理解を促進していくという取り組みなどから、当該団体が「すべての子どもたちにスポーツを身近に感じてほしい」という高い視座で活動を展開していることがうかがえます。冬場の子どもの遊び場の提供、運動不足の解消、といった具体的な課題にこたえているところもすばらしいと感じます。

フリーペーパー「MemberOver」は、地域のさまざまな関係者に寄稿してもらう、企業から協賛広告を得る、そして教育委員会の協力を得て学校で子どもたちに1冊ずつ配布する、といった取り組みをされている点が光ります。媒体を「つくって終わり」ではなく、地域を巻き込みながら価値あるメッセージや情報をしっかりと、かつ継続的に届ける仕組みを実現していることが、選考委員会でも評価されました。

今後もスポーツの楽しさや魅力を発信し、子どもたちのすこやかな成長に資する取り組みを展開されることを期待しています。

## 受章者コメント

私たちは、「子育ては地域全体で支えるもの」という思いを胸に、子育て世帯に寄り添った活動を続けてまいりました。子育て支援団体Haportとの連携による「おさがりイベント」の開催や、指定管理者として運営しているウインドヒルくしろスーパーアリーナ内において自主事業としてキッズスペースの新設や「こどもアリーナ」など未就学児の遊び場作り、インクルーシブキッズスポーツフェスなど行い、親子が気軽に集い、交流できる場づくりをしています。また、地域の子どもの活躍を伝えるフリーペーパー「Member+over」を通じて、こども達の活躍を応援し、記事を通じて学校や家庭内の会話のきっかけを生み、地域のつながりを育んでいます。そして、事業に関する作業については地域の就労継続支援事業所と連携し障がいのある方々の活躍の場としています。

これらの活動は、指定管理者として運営している施設を最大限に活用しながら、自主事業での売上のほか企業協賛や助成金、など工夫をして行っています。こうした活動を通じて、地域の誰もが「子どもたちの未来を一緒に支える」という意識を持つことが、持続可能なまちづくりに繋がると信じています。

今後も、子育て世帯に寄り添い、安心して子育てができる地域社会の実現を目指して取り組んでまいります。



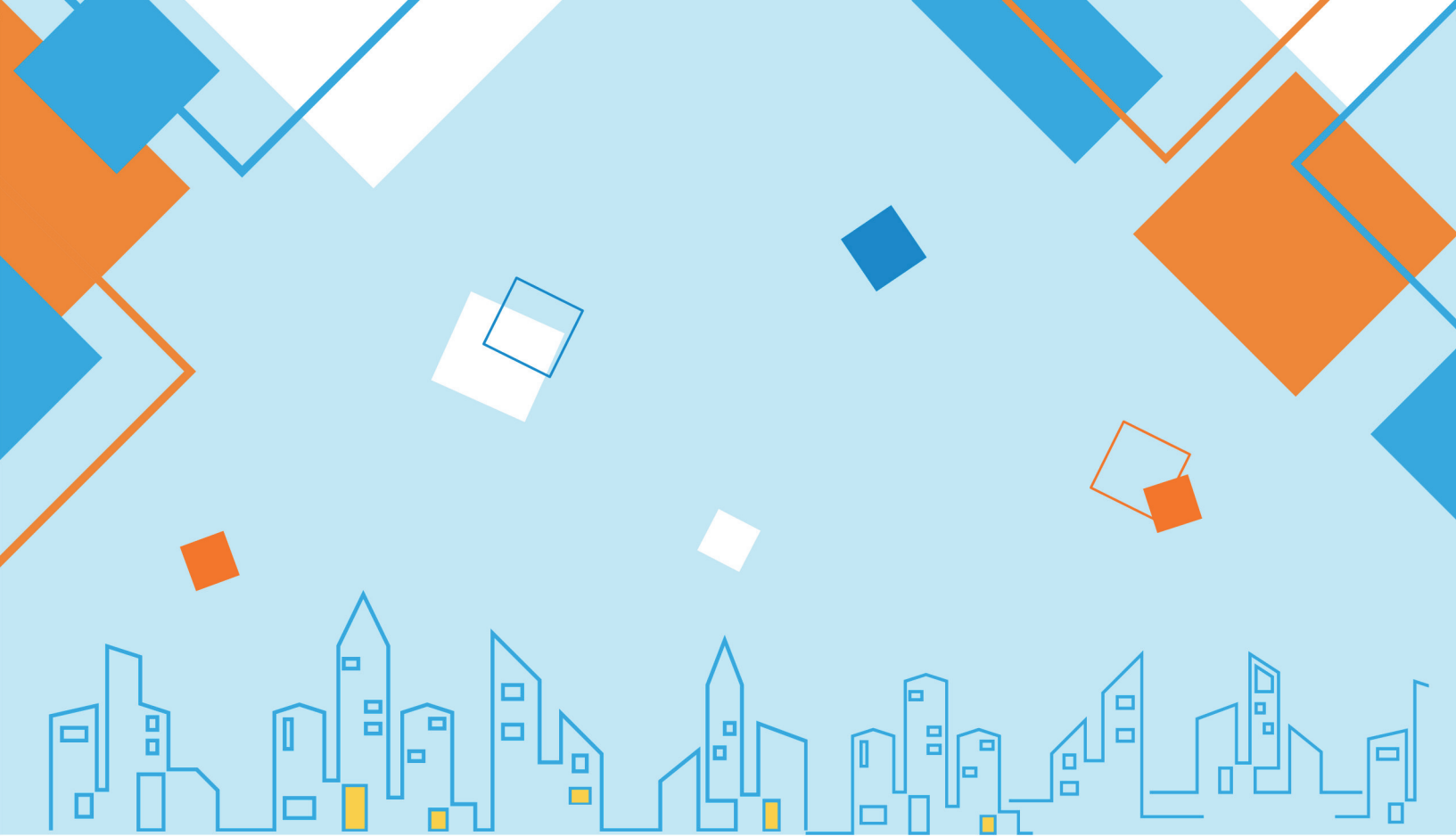
**令和7年度**  
**第3回「未来をつくる こどもまんなかアワード」**

**選考委員会委員**

- |        |  |
|--------|--|
| 石田 陽彦  | 関西大学 名誉教授・人間健康学部 教授 [委員長]                |
| 氏家 秀徳  | 日本青年団協議会 総務部 部長                          |
| 加藤 早耶香 | 特定非営利活動法人 全国こども福祉センター<br>つながる通信編集長・現場担当者 |
| 鈴木 晶子  | 特定非営利活動法人 パノラマ 理事                        |
| 鈴木 顕   | 朝日新聞出版 AERA with Kids 編集長                |
| 田中 れいか | 一般社団法人 たすけあい 代表理事<br>一般社団法人 ゆめさぼ 代表理事    |
| 新田 香織  | 社会保険労務士法人 グラス 代表                         |
| 吉田 ゆかり | 特定非営利活動法人 未来ISSEY 代表理事                   |
| 米田 佐知子 | 子どもの未来サポートオフィス 代表                        |

**こども家庭庁 支援局 虐待防止対策課**

〒100-6003 東京都千代田区霞が関3丁目2番5号  
霞が関ビルディング 20階  
電話番号 03-6771-8030 (代表)



こどもまんなか  
こども家庭庁

